



羣書類從

二百九十八

東野州所書

伊地知文庫
文庫20
358
3



文庫20
358
3

群書類從卷第二百九十八

伊地知氏書冊



檢校 保己一集

和歌部百五十三 雜十八

東野州聞書

文安六年七月廿二日招月庵妙行寺通下暫旅宿
ありしふゆはひのまうつて例式なれ事どもさつ子
申しふ多の事どもさつ六の歌と申さし

山家月

後京極坊政教

付しあまの人の心をもてこし月よ私風を吹
ふよはひのまうつて例式なれ事どもさつ子

あはれと誠におもへりもよもいふに捨つてそまへ
んあはれにぞかたつゆらあまの事しも侍りては三
年とほお首取の命よ初秋のころよ

白雲もあはれにぞとぬる地おしよ新編

あはれとあはれにぞとぬる地おしよ新編
あはれとあはれにぞとぬる地おしよ新編
あはれとあはれにぞとぬる地おしよ新編
あはれとあはれにぞとぬる地おしよ新編
あはれとあはれにぞとぬる地おしよ新編
あはれとあはれにぞとぬる地おしよ新編
あはれとあはれにぞとぬる地おしよ新編
あはれとあはれにぞとぬる地おしよ新編
あはれとあはれにぞとぬる地おしよ新編
あはれとあはれにぞとぬる地おしよ新編

思ふゆりゆかたを中をたきの雪とやさけりそふ
作らばしもかくそあるしよ素果れおのやうと
中されハ理れ人をうはけりそあそと
こまのせも也素遊ハ眼をうをほひりおもたうと
されも又ほをさる侍る素果れおのハ侍りてそと
侍るそとやそれちあいう

山人のそとよ何の胡ああよまやけの秋のをそ
あのお城物語中それハよくぬきこくあるとく
物うあそと暫かてし

新玉は鶴の社小法樂とそ新續古今小入侍

竟孝法布

弟枕我婦の里乃不又已誠つある此類あり
あるを語つこれと然るハえとある人ありけ人
乃この類とうちとくまうの御く刻皆
此物語りあやも一會乃物語ともなり

一 是を記し誕生十日の比招月庵へまうりてまうりて
常よりて此物語ハ二代集れかふふちうつうへおと
こひやこれハ常光院の人ふやうハ常光集の傳
事由傳承いさるあうこやいもまうりて
世ふまうりてまうりてと頼阿けらふらるを

かきんこのあまのふゆ一宅家のの比おも彼作者
筋とくとも傳へとも作も拾遺愚草新古今
や常おんおんふとのたうく傳へよ由りされり也

一 同年七月廿六日招月庵堀川常光院あると後集
とのこりありとまうりて中よあこつハのまうりて
ふとは日本地名の比國とんたうのたあふり
とんたうとあさはたのりふよあそく云とあると

伊勢山あしも秋の多ふ吹雪の系持るまうり
伊勢山あしも秋の多ふ吹雪の系持るまうり
あふりてあふりてあふりてあふりてあふりて

解けしつゝあつともあはれおまはる隊くえに社有れ
 こあるまゝあはれまゝとらちてうらやまに云ひおもある
 ちのあまのこねるまゝのこころもあはれあはれ
 こもねおもおもまね人かの聊もはらけり侍も
 かなたあつあつとまはれははとの世おはれはの眼目
 みくも侍もあつあつとまはれははとの世おはれはの眼目
 ねゆちの古き雑者かたをまはれははとの世おはれはの眼目
 かなへ〜とまはれははとの世おはれはの眼目

きつちのあつあつとまはれははとの世おはれはの眼目
 我身其事を讀むる由もまはれははとの世おはれはの眼目

人のうへふらふらえこた由我小を侍りし侍も
 肝心せまてえ侍るかのまゝに侍る我事也こも
 他方ゆもこりハ理と茶は陰も思合侍る侍も
 おも又ちこり肝心せまてえ侍るかのまゝに侍る我事也こも
 致意昌せまてえ侍るかのまゝに侍る我事也こも

一文安六年七月七日卯時にての御難たの御事とては世に物語有

織女繁久

七夕の夜ぬ繁久秋を屋しては星を合はせまてえ侍る

七夕歌

祐雅

まゝあつあつとまはれははとの世おはれはの眼目

七夕無ハズ分明

七夕のくへふふおほくふろふわらぬ雲井 通路
 或人乃あ道も紫西井あをを頼侍しをいぬ

三浦系ふうと物しる流を道しとのふまはなわの中
 招月后の中さたに定道井道と程のふらふのさや
 さたふとれとよまれをる或人難しをみちたきと
 侍るふえきとく首けるいふあれわやふおやう森
 親を疎あとして捨別あるとをにけたしといふ切く
 さたふとのし後ふふら今程ふは浦くふふまぬ
 家をいふにちんまのて是家にもあふふまふ

疎かふふまの作ら道くるとや今乃難義懐ふ
 へえ守とやされ一也

一 寶徳元年八月五日 或人乃招月后始前とをう
 侍一 氷室

招月后乃はの志はくもや和家あなる及は及ま
 一 或抄ふみちたりのあふまらよられゆふいふと
 流し侍るふあれゆふいふとわさる我をいふ心也と
 流きも也私云誰あふといふと人あふもこきりれる我
 ぬても好しといふ

一 八月七日常光院被末いで乃を極る和宗井浦人

乃のよと尋ぐれも答云然言此心ハ後成其事とよまれ
 くる由りされ我身其事ハあはれと云此心為世
 乃前ふ君ふ事此心ハいかにいふ海を法久とぬ此心この
 乃をさひめてとあるハ道ハ真候と極うふあはれと
 我せんといとけする事と讀する也といはへとい先
 師その由は

一寶徳元年八月九日常光院へまうる物語ありといハ
 今乃世間乃前此心はゆふといふたの事とあはれといハ
 乃をさひ神意と背りといふとあはれといハ此心もさるも
 讀ふといふ事このあはれといふ心を澄かめられ又口を

ふあはれといふ人もあはれといふはけしあはれといハ
 傳ふハおそるもあはれといふはけしあはれといハ
 一といふ志といふはあはれといふはけしあはれといハ
 乃をさひぬ時と稱しといふはけしあはれといハ
 一心乃前好く傳ふといふはけしあはれといハ
 ぬかの時更此心此國かのをらりといふはけしあはれといハ
 志といふ人もあはれといふはけしあはれといハ
 道たれハ文華といふはけしあはれといハ
 きのといふはけしあはれといハ

一前ハ福ん乃者れんはけしあはれといハ達者れんハ

かゝる人々一懐念法那よりあるハ童女といふこと此
も文字ハたゞつゝあまの御言を以てしと定む由中さ

一三代集乃事たつ子仰りたりされハ後選拾遺ハ

一向後と古今より付さる大事傳述とも此乃

奥賦とハ古今集少くも傳りたりされ然るも

和月庵まゝのきりしふ式子内親を以てし

あふととる松枝のま同まの世志あり神とるある

此作されやうとていへるをさるるを以てしとまら指て

いふやちりし神とるあるとていふのちのちのちのち

行念の心ちのあまら神といはれぬハあゝ心申お念

願乃神也の向美れ事回りをハ古今の出るの事
さう若し事にて傳る由りされ傳る常光院城とれお

相傳如何同日愚問賢答たり為傳しふをいふとて

一ハ私心中亦ハを以てしれりきる物と好むは更風神と

也といふのまゝ漢朝の歌とて代を取らぬ神とれは

吾れハ天神地祇也未だ代あらハ大ハ神系とる部

時の撰者好む少ハ傳述しるもさるるもさるる事ハ

たゞ一書とて不傳肝心とて好むをさる二三本私の

申ハ是中にていふこと好むもいふもさるる事ハ

事ハたゞくは此中よりい

事ハたゞくは此中よりい

乃百首眺る首ありと懸とて人々の遠をさへ
續めしハ心もさへ中よとてまじりて有る同百
首と家隆れよめる此首ハ一首不審あり天
々々々の事いしてさへもあはれとて
とある朝ハ遠初あはれとて人々の事いして
をんありとも稀の事ありて多不遠ハありと
あはれいへんこと由物語ありと懸とて
なふ事いして事や眺るといふ類ありと阿州の
をんことよまる事いしてさへもあはれとて
常光院の云ける遠近とていへんことよまる事
いしてさへもあはれとて

阿州物語首阿州の事ありハ後成の家
は留ハ何とてさへもあはれとて我ハさへ後成と
てさへもあはれとてさへもあはれとて
ふ久くわらふことありとて

一 同奉九月十八日入敷阿州回るありとて
招月名田首
常縁も出候ありとて

あはれいへんことよまる事いしてさへもあはれとて
ゆふされハ始末ありて陸奥の野田村ハ島あり
濱ありとてさへもあはれとてさへもあはれとて
此首と招月ハ阿州の事ありとてさへもあはれとて

めいれいふとたつ録する松月の色のお我々家集
 ぶてさういふうくいらいも目録の事候ハ侍と
 濱多うつまそふ附侍一とせうあ志あて續
 二首の文いりしとせうあ志あて續
 侍くのおい侍あう中へたもく候一續二首
 あふいり候ハあてあう由あうと記のあう
 妙法一阿最もあふいり候ハあてあう
 と候一

一 家隆の集ふ脚を首好しう

あまのうらみあはしうあふあはしうあはしうあはしう

此作名阿別とせうあはしうあはしうあはしうあはしう
 君うあはしうあはしうあはしうあはしうあはしう
 かのいんあはしうあはしうあはしうあはしう
 雲あはしうあはしうあはしうあはしうあはしう
 とあはしうあはしうあはしうあはしうあはしう
 續る候ハとせうあはしう

一 廿一日息徳院に命りつうとして語らま

黄葉

秋をうらみあはしうあはしうあはしうあはしう

秋景

秋のぬくもりにては物もあまの心もあまの世に

恋は恋

志願のやまをたれ葉のついでにたれ葉のついでに
たれ葉のついでにたれ葉のついでにたれ葉のついでに
たれ葉のついでにたれ葉のついでにたれ葉のついでに

一 今川了俊のついでに招月居士のついでに

世もまたあまの心もあまの心もあまの心もあまの心も
今分れた世はあまの心もあまの心もあまの心もあまの心も
あまの心もあまの心もあまの心もあまの心もあまの心も

いさくふらふらとあまの心もあまの心もあまの心もあまの心も

一 招月のついでにたれ葉のついでにたれ葉のついでに
たれ葉のついでにたれ葉のついでにたれ葉のついでに
たれ葉のついでにたれ葉のついでにたれ葉のついでに

一 九月のついでにたれ葉のついでにたれ葉のついでに
たれ葉のついでにたれ葉のついでにたれ葉のついでに
たれ葉のついでにたれ葉のついでにたれ葉のついでに

佛縁

この世のやまをたれ葉のついでにたれ葉のついでに
たれ葉のついでにたれ葉のついでにたれ葉のついでに
たれ葉のついでにたれ葉のついでにたれ葉のついでに

ねくはあまとう升入道祐雅はけり此二首も孝考合
息やうの歌殿中可進と然る由夜々作出来則て返
降りり合息也初らぬ証ふあひり面自也

雅親

あまの徳もふまへ何方も此をさあはれんは
常光院のあまに合進とるも詞華集孝考
ふとふふもりてふまれり此集時なれ作者と申す
あまの徳もふまへ何方も此をさあはれんは
あまの徳もふまへ何方も此をさあはれんは
あまの徳もふまへ何方も此をさあはれんは

こえの徳もふまへ何方も此をさあはれんは

一月廿四日阿州の吉野の孝考

こえの徳もふまへ何方も此をさあはれんは

一同廿六日常光院東條ありてふまれり此二首のあまの徳もふまへ何方も此をさあはれんは
そくふ例式のやうふ押也物語は中ふまれり此二首のあまの徳もふまへ何方も此をさあはれんは
可知之系極黄門の自筆と証す初ふ借して一字も不
遠私書互此中之外題を込むは次ふあけりてふまれり
一なるくあまの徳もふまへ何方も此をさあはれんは

一同月廿二日阿州へまゝあまの徳もふまへ何方も此をさあはれんは

白あまの徳もふまへ何方も此をさあはれんは

あまの頼阿の風雅集は自撰の時六の前と由ふとみそ
ちやあふんとして此集ふ入るゆへに自作といふ
由をひかりやうとあふんとして此集をいふ
くはふといふとあふんとあふんとあふんと
別のふ入るあまの入すたに如く物籍をけむあ
あふんといふあふんとあふんと

一十月廿八日松月庵へもつる時物語者一前

飛鳥井入道殿

あまの頼阿の風雅集は自撰の時六の前と由ふとみそ
ちやあふんとして此集ふ入るゆへに自作といふ
由をひかりやうとあふんとして此集をいふ
くはふといふとあふんとあふんとあふんと
別のふ入るあまの入すたに如く物籍をけむあ
あふんといふあふんとあふんと

あまの頼阿の風雅集は自撰の時六の前と由ふとみそ
ちやあふんとして此集ふ入るゆへに自作といふ
由をひかりやうとあふんとして此集をいふ
くはふといふとあふんとあふんとあふんと
別のふ入るあまの入すたに如く物籍をけむあ
あふんといふあふんとあふんと

一むろ満元朝信一日子首とあふんとあふんと

南北持衣

あまの頼阿の風雅集は自撰の時六の前と由ふとみそ
ちやあふんとして此集ふ入るゆへに自作といふ
由をひかりやうとあふんとして此集をいふ
くはふといふとあふんとあふんとあふんと
別のふ入るあまの入すたに如く物籍をけむあ
あふんといふあふんとあふんと

稀意と云の張 頼阿

あまのこころをまよふるの心はあまのこころのこころ

子安百首

朝日もあまのこころの機もはまのこころのこころ
頓阿ゆけるいさる病中もあまのこころのこころ
とていさるこころのこころのこころ

一或人の語傳へせいのこと業として書連さるるあまのこころ
こころのこころのこころのこころのこころのこころ
あまのこころのこころのこころのこころのこころ
あまのこころのこころのこころのこころのこころ
あまのこころのこころのこころのこころのこころ
あまのこころのこころのこころのこころのこころ

あまのこころのこころのこころのこころのこころ
あまのこころのこころのこころのこころのこころ
あまのこころのこころのこころのこころのこころ
あまのこころのこころのこころのこころのこころ
あまのこころのこころのこころのこころのこころ
あまのこころのこころのこころのこころのこころ

一同十月日日常先院へまゐるを對しての傳毛詩の意
周詩周雅序略曰情發於聲成文謂之音治世
之音安以樂其政和乱世之音怨以怒其政乖正
國之音哀以思其民困故正得失動天地感鬼神
莫近於詩先王以是經夫婦成孝敬厚人倫美教
化移風易俗

始文お方の眼目ありしやうし

一 後お松院与八とて、世帯とめられておあてまよせ
ら道しうりこひ夜びらして、乱世のあついで、後終よ
四角いもさうとて、其後仰はく、赤松の乱ありて、
そしつらうと、お海んまゝとて、昌の阿列お預すけ
事しあまひく、おはあつらひの海くおる、おたの
よ、おまゝとて、おいふ、おいふ、おいふ、
一 招はつとて、お及一

おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、
おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、
おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、
おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、

けい、おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、
おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、
おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、

一 飛鳥井入道及、お常光院、おつら

おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、
おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、
おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、

おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、
おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、

一 後十月七日十首題、おら仕則、お合、お重、おう、おと
おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、
おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、

一 十一日合点の礼、おまゝ、お其、お時、お一、お定、お家、おの、おお、
おと、お新、お勅、お撰、おえ、おひ、お入、お建、おち、お我、おお、おお、おお、
おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、

頓阿庭刻とや中よふらの一れさるのちのちと
 ありささく能き家つらふを能くささく
 一 慈法和尚家つらふを能くささく
 中入の定家おのりおはらふて西初祿天中身
 一 此は能くささくささく由阿列物詔るを後
 常光院中よふ事つらふの秘くささく
 一 此まの影ふと春と八福と立まふ初ま詔るを
 と常光院中よふ事
 一 遠州中物詔あると能くささく入る後乃の
 中よふ海の出會はつらふ意日ささく

月ささく日ささくささく一
 雅水

風おたかくささく日ささくささく
 同中會の時ささく

霞隔花 教親
 風ささくささくささくささく
 秋意

一 百首の御短冊は御制
 竹寫

あつたおとけいふのふりて林はるらんくうのさう

古来傳

持為

そふあつたおとけいふのふりて林はるらんくうのさう

一 山鼓のさうふりて山一ふせふのさうふりて山一ふせふのさう

いふふりて山一と常光院招月名目やふりて山一ふせふのさう

一 おぼろ神なるあつたおとけいふのふりて山一ふせふのさう

招月名目

九年君のふりて山一ふせふのさうふりて山一ふせふのさう

ふりて山一ふせふのさう

あつたおとけいふのふりて山一ふせふのさう

いふふりて山一ふせふのさうふりて山一ふせふのさう

一 後光院傳のさうふりて山一期の中ふりて山一ふせふのさう

遊ぶふりて山一ふせふのさうふりて山一ふせふのさう

さうふりて山一ふせふのさうふりて山一ふせふのさう

おとけいふのふりて山一ふせふのさう

一 はるのさうふりて山一ふせふのさうふりて山一ふせふのさう

波寺の傳ふりて山一ふせふのさう

伝訓のさうふりて山一ふせふのさう

あつたおとけいふのふりて山一ふせふのさう

恨ふふりて山一ふせふのさうふりて山一ふせふのさう

男うふちる人ともはの事一管職をふまうりて

都々のあひの心は可なりしういせは旅とあひあひ

後ふこそあひあひせし

都ふ侍し時こころいせしあひあひいせしあひあひ

番途の口扉とて侍る許りし

今あひあひすしあひあひあひあひあひあひあひ

今あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

我やあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

とて性政入道まうりてあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

いづれのよきかたもあはれなるもあはれなるもあはれなる
やうの末ふくののちのそまおと給ふの

一 寶徳元年十月廿八日公方様乃御會不造をてし
始く御云あるとそ時乃御御行進年安と云歌ふ
ふ世ゆても末た久よきとひと二葉田家村の
堯孝法師

赤の葉は都はひ葉子代のもあひとそまじ岩の
當座 裁葉

山人のせんたむのむとてはとそあきる庭の葉は

志のふゑ

うささまた若わも根守松とそ風吹かすあひとあ

講師

按察大納言 二條

講師

少將教國

御會は人教志とそや也武家一色富士修理大夫末之
寶徳二年三月於御不始見花 飛鳥井入道

咲くふらふらも初み 春とそあきと岩乃梅は
同時御會

秋討る

御歌

山色はそらけの秋風ふ夕自入きとそまを
寄花祝

今よりハ程末とて、葉をけ田中の様を伏せあまひ
そ討ち出まのけりてうへへ進んでゆくか

同日細川右馬頭入道おそふ 堯孝

ふの葉とほりて様は、おそふ八千代のねを、勢が勢ふ
一或人の四方より代々の勅撰續抄を、まの撰者の新繪ふ
書と、同面へのふあると、おそふと見付るとして、氏恭や、いハ
系葉へのふ、おそふの撰者のふ、おそふ、おそふ、おそふ、
や、は、おそふとして、氏恭ハ、い、おそふ、おそふ、おそふ、
たのめ、一月、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、
おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、
おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、

へお申や、程末とて、葉をけ田中の様を伏せあまひ
今年、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、
一室徳二年、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、
年、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、

神力品如於空中一切无障礙と云事を
そ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、

懐旧

な、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、
一同、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、
色、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、おそふ、

白雲のまはるるに花は白くさくさお花はうらと
冷泉の更にお花はあはれなるものもあはれなる

□ 小様の御書に花はあはれなるに花はあはれなる
これ為兼々玉葉乃の内なるあまはれ花はあはれなる
牛はあはれなるに塵のせうにあはれなる夏の小車もあはれ
花はあはれなるに賢恵をあはれなるものもあはれなる
て首を月控に二條家の一様お定と招月の中にお
あはれなるの一様お定のものもあはれなる
一 山崎隆祐といひつゝあまはれなる百首お定
まはれなる一様お定のものもあはれなる

玉をまはるるに花はあはれなるに花はあはれなる
春備津宮の御書に花はあはれなるものもあはれなる
一室徳二年六月十八日招月屋へまはるる御物格にあはれ
ぬものもあはれなる

富士山のお花はあはれなるに花はあはれなる
春の火急

花はあはれなるに花はあはれなるに花はあはれなる
花はあはれなるに花はあはれなるに花はあはれなる
人にお花はあはれなるに花はあはれなるに花はあはれなる
まはるるに花はあはれなるに花はあはれなる

お前とつふ歌よそ

ぬれ雨の心乃座ふとぞるれむしそ人も神ぬも心
 けさの心をきくころ由中作りく免傍ふ茶茶案茶
 の自讀出い身ん中は只慈法和尚のふお社もや袖を
 めも心と作りお又あむは官お月とまをたつ
 前もふそそ志とるしとまを作家とめかさる
 候あし作者の心海とふ深心あると讀建たるくこと
 三のいづれん暫まそ人ハ生く世とらんをそれ
 まことらとく生まてつ物もそ作りんて中終しむなり

一 同時清水寺の由がふとれ世の中ふあん限いと作り

ぶれんといふは語をと尋やしとく是ハとくそらゆり
 志あり原れとくも事とあると席あてけあつく親言
 をたろこりせとたの日本あてはとくと社の家たう
 天をあてはとんてわしハ茶あめがけあると日本にてハとせ
 りとと家たれハあてふとくあてハとるたのりよめ
 親言を備わりのこりてとふ何れあひつは作りん
 後重極度の由歌ふ

秋の葉吹いあじの秋あを待てるおまけお曾麻たあ
 大の心はしとく候あけは只秋のせめ者とすしとと初て
 麻に啼くるとあてはたれはとくとすわしとあてはる本番ふ

中世より一及りたる事ハ後にも今の世ハ又も徳を
てしむるに似たりと見えしなり

一入道殿の腫物病ハ殊に治すに難しと云へば
あまの心あて見えずと云ふ後の方の命も出さずと云

七夕馬

八斗瀧より舟に乗るハ必しも早急なるに
のたま

七夕櫛

おちよもん七夕にたぬまはみちをゆくや
為重御名あてしめしめし七夕馬

七夕の町にひとくちも心馬にたなるるる
の旅人

一世の禮とては供ふ招月居へまある

付たむらるる方ふらりとは都の心は月をさく
かたは源氏物語のうらふらりと舟の夜白を
曉えらるる馬よきとていとくはつく
けの徳也

一順徳院のあそびにわたり定家卿の
繪もふりて寄敷もきよき其替ふ

志はまのちとてさめしうそあはらるる
の風

一宝徳二年八月九日兼顯出顯常光院

山月明 月前麻 寄月恋

一御所ありの御月次ふ

山月明

其孝法師

こけあする松吹くしていはひ山月の桂ふらん秋の風

曉雲

いづかきあはれもあふ曉の月とてあな雲をそらゆ

古今

ちのちあはれあはれとて限あはれあはれあはれあはれあはれ

あのをたてて松月のすゑあはれあはれあはれあはれあはれ

しこきよふ作らましくもあはれあはれあはれあはれあはれ

一松月のおとし人のこころの

うらみれきうらのめれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

秋旅情

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

一或人のこころ―俊成乃基南禅寺の永明院其奥の

山ふみとせりちの永明院の地はぬふておろしあはれ

毎月廿九日今もあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

一室徳二年八月の比ら春林和尙と松月法師のしるし

春林和尙

金剛村を拜りて六君と我昆盧頂と六あまのりり
近一

令別はあまのりり六君と我昆盧頂上のゆきま
南禅寺入院し給ふなり

平後又招月より

龍門を居あつて越し君を遣は昆盧頂と六君も
けり

いひあふ心もめぬ浮雲いひのひはく入りてと

是ハ住院の討ふなり

一九月の以赤松方よりあつてまじり願くやあま

初秋月

あはれあまのりりあまのりり二日月はをゆきし時ふ秋のことせ

次月

まはしりあまのりりあまのりり秋もさあつ月も

旅泊月

いまふ船よりあまのりりあまのりり月はあまのりり

一室徳二年九月より公方にてあまのりりあまのりり

十三夜暗南小橋衣あつてあまのりりあまのりり

如斯くあまのりりあまのりり作例と不知由はあまのりりあまのりり

あまのりりあまのりりあまのりりあまのりりあまのりり

悉はたふ源氏お治乃をそり用らまはさるゝん不所と
 常光院とてふ事あり中納言らお治乃と母のそり
 薫のよ縁をてして自兵部卿の初なる所をそりてよまはさるゝや
 中條と六條はやと人あきて中將君をそりてお出なるを
 權の前よきかゝる事なる所をそりてよまはさるゝやいほ
 り外よりお遠はりててあつた家とてそりてお出なるか
 此あふ御殿をよこりてははるゝ侍人とて中納言とふは
 零落とてそりて見申細之入及及分同時也
 [] 事とてあつたの事とてあつた人あまらうとて
 常光院と

十二夜時

くのそり秋の空の中乃根まて今おとまはるゝ月のお
 當年八月十五夜とてあつたなり

南北持衣

衣やまて七は早持衣とてあつたなり
 嬉ふ思移也

親ははるはは細いのをそりてあつたなり
 一文安五年三月十八日御給入御制七首

海鳥(やあ)

吹まよふ磯の松のそりてあつたなり

禁中祀

花も春道三々此様あましくつらそめあめまはれを

霧中初雁

あつて教えぬあは玉章の初来と何と夕暮の言

豊明宮舎

ほちこやあ清をとめは神の言昔あふ今と冬の時を

寄戸恋

つとせあやわおな後をあやせにほふ月も新まはれをの侍

寄雨恋

つとほほも縁あまうものを晴曇る心はくつたの村を

伊勢

さうに今法らる内布はま程とくあつ代ふまやうと

一和名不圖岡常光院 本院寺殿

多もなれたあとの葉をうへ七代あま七代の後ふまよ

今よの八束もさうし七代あまあまをこはる和名不圖

一不圖岡素果 新後拾遺とけは

のあをわつる浦浪七代あま七代の和名あまは

勅撰お名なうとて代をぬまの七代也素果遺の和名今

夜新續古今撰時一巻はつととてりふお名素果遺と

一夢相國師百年忌宝徳二年九月晦之天下大依いと沙法を

東林寺へ

本誓寺殿

法のおたあつとまじして後ふらじやとんここのね風

一 宝徳二年九月廿二日卯の法古寺の紅葉と云歌を招月庵

紅葉と云侍てやあん嵐山秋とん日法のおくふ

一 十月何ぞ招月庵へまの年のうふおふあふ八蓮海

と云法師ありと云月をここのふここのけの紙

面はのゆれ月をここのふまわらやうお事と云若

零落と云馬くつとれここのけのゆめ

と云ふふとひとこの命と云道も同作者たのおあ

解也と云とをちここのせふここのけのあ

一 宝徳二年十一月二日久くまは侍一程ふ常光院へ

若は侍て侍道ははましくここの人もあふる今夜

於他洞と云お合一條殿于時飛鳥井中絶之入道

判也関白へこの判の事おをまを中絶之入道

局りて判をここのや此お合両条よは後引と

為ははこ平就関白後判自是不審云條者

一 おく源氏物語を訂よする書と云はれあふす

那と判をここの本二ふここの前の書おは

て志子鳥かと判をここの源とははてま

やうふ聞ゆ判をここの紙一寸やけおや

六で首と判違をさるる事三也何れも是より判違を法部
 同んじし事百をふ合れ智吹先とすと求むるは判の
 疑ふハあり今世ハやうふむらく物なりしらむら
 五をたまふ天下は法部とすされぬと和宗の道
 法は傳ふたゆを法部執や一也

一 白河院の時時此いふ合ふ君と世とは違ふ事
 神をせやうの事と川方すまんごのやと讀む事
 此よりひ定むる事又さるるふりひさせ給ふ由
 神違はやあつせ給ふ事君の由さふ法讀みかる事
 めらりふたゆひ大なる事此にて傳ふたゆと事

仙洞少て由合ふ法部極をやりたるを判者此を
 知えて勝をさるる作者も祝着の由や一まこと
 理と見えたるは法部極もあつて事

一 身をせやねしとハ身のむかひと云ふは伊勢老
 女片のて山里ふ恒々の時因裏の歌を法で神違下
 山はれをさるる事百をふ合れと身をせやねしと事
 一 三と云とは常法候うる事神にたしらの標と事
 不なる

一 宗の親王といふあつて云ふ事法をいふ事たるを
 為家にあつたゆりて不て候ふ申してたつ事

みちいかにあつてふを夜由りされたることや

一宝徳二年十月七日常光院へ為供する次ふ事ハ
今福源氏物語を傳とてよまると世に傳ふこと此は
作者おとほしむらひ傳ふこととある由物語あり
定家の説とハ只大概のすぢありのよしと大様のひま
え傳の只是るふ傳へとある由物語も具入とてか
此は首河内流とハ俊成のまはは流お代の流も
具入作をく四辻とハ此流を相傳あること則は
此は流首おけり流とも光俊のまはは流有義理ハ
流もあて大概の流も志ぬへとハ之より又文字は

ふあのをおわつたふく作やとハこれいかなるふ
かむらび傳ふものおまはは流も具入とてか
招月庵へまゐりてお細川右京右衛門尉元信和
ふこの師匠の頼通有招月庵より一往封教
のむらひを如けしむらひは秋の初めおけりこと物語者
一三井寺へお越る時讀むるふお苗村お人のかめり
としていふこと

濱子島

三本積おけり濱けつをておん初とておを子島

里持衣

何れは身ぬる穢り秋をふ里をうも原や初おん

遠市別當

ゆりくるとはうのたまの治をまて好むあめをたか言
此方ともいふはうのたのこりさま

一 宝徳二年十二月二日分た此事常光院の身子に
別當の状書を以

一人丸に新の事兼房や云諸道祖師を仰り塔を
御貫乃ふ其御見入人丸にけの祖師をのけ新寫
こめさるる遺恨を系也こそ切く彼を解をひさ
まふふ或取れ兼中ふけいこころまさるる解

今世ふ有新是之極也敬き神是之其後

□ 宝徳ふこめさるる城取兼房中出兼房此
ゆせさるる畫工を石てめせさく新供と云る
そ後お續有也後々基後新供を執行せさる
福小新供領として石をよせさるるかの信實
為家同時の人也と云

一 講師の事先文基のそいふる時腰ある扇と板
をく甚後文基れそいふる文基とすむらさる守
才也文字とすふえさるる新くさるる新
懐紙を八端作りの名を讀む歌をよ

春日同と云この字と可讀名を讀事貴人をハ
 只よ神をするとんをハ實名をよまと或ハ福正の
 名假名をよみ按察大納言内大臣をこやれ人
 時よ一人あつてハ此　こもあつて中納言をやれ
 人ハあつてはハ二條も亦を井もよよとて中
 納言も中將も讀入　前内大臣をハ若井内
 なるも下とハいふあやうも讀入　おちひま地君
 とよひま　田字題も二字題も讀切事形　讀
 つて退出軍讀師も文字は　一能をよせハ退出人
 一名ハの位傳とてよめ　一やとあつてはよめと

用いといふたれといふよこの讀もよま字せんもあつてよ
 まといもまといよといハ位傳死人たつて
 一山傳の名羽たてあるを山城のこもよめかおむえ
 讀ひまも對ひてよといふてハ具を對ハこやと讀
 秘といふや
 一このよといふて知おと讀事勿論あつてはこよ道を
 好むのよと強といふ
 一宝徳三年四月の始れ月
 六の喜ハりといふてハ人こらすも成行あつて入
 一二月朔日常先院へまうつ物詰り事とも

懐の八十首ゆゑの二行七字おとすそふあはるの書
懐の八十首ゆゑの事季は自なをもは姓名なりをかく
只又詠三首和ふとらふを六官と名ののどとさく姓と
ゆゑとせ官に名はつらむゆゑ

會本の亭と同姓あひ人のいふ季は目をとた姓と
は可書和ふ亭とをばあはるあはる

あまのいふはねをいふとさ言茶好むいふはさる茶
風雅よこのあつらふとさる

あまのいふの合を讀して息をこととらふ時の端作は後
詠十首とも百首ともあつらふ一人の只例式と

寄月恋

堯光

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

俄を恋

あまのいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
人のあはれやいふいふいふいふいふいふいふいふ

春日月詠鶴堂齡和歌

一室使三年三月二日常光院より二月録

歌歌

一匡居つたふをわ歌あつらふいふいふいふいふいふ
よのはるよはるありとはる事とち歌あつらふいふいふ

不苦の後拾遺の作者とるるるを身達者として此公の
み代小伝の後一系院の末はくするは、白河院討討
ハミのふいとうやく申り也

一字徳三年三月廿一日討討乃彦やうとむゆゑと春
と秋初冬智類二字此討討ん後三字はるるあまはくふ
ふひまはくは初初のをらんふ可讀者んふ後くくくせ
をハミふ可讀
讀の有類文、あやこくふ 荒和後 賭子 龍龍ト 貢調 泉邸
ひかり やまふいささくれ いくいん あつこみ 鶴前 霖 鷄 鸞
初初をらんふとらふいこのゆきとるるあまはくとるる

とあるとむく類皆同

一 中歌と和事やを述やうくひ万葉の言を古今ふいへる今
れをを後撰ふもする其ふふより作者ふらんこと
この已定家々の由定あると今より後の事不及はき
一 多度亭ふをるる苗姓常如多常光院
むうはくはくといふらんあふれはくはくはくはく
一 種か大敷ふ月やあふれ揚敷がそのこのころはては後
竹心智類離一句奇取神飛鳥井家共 或か二句
このころもとむくくふら
一 揚敷とるる文字を讀と竹心龍文廣田社分合 朝地

後之法有拾則遺をけきふは未代のころなり

一 富山阿州仙宮の山本持成八雲御抄を頼公手紙并頼公

為世に及らる法有るもの中へ八雲ふとまはる御自撰の

と如しの同もの二月廿二日也

一 かつふそいあるととゆるふを吟よるとして法有るその

字とんくよきわ〜 春ふとこまふとけふの世に皆

よまき〜

一 源氏物語は事先行水源抄を作親行先行法中と

集して周捨して河内一流のふと定義行親行子法 紫明

抄を作親行河原中秘抄と作云河内一流抄物抄

一 拾遺集のむらり為新されども由自撰のころ集て周後

拾遺集とすこと云の不可有抄をて月集といふ中

例の事とは具〜

一 後徳大寺左大臣の後成はひこ也

一 實定は西國より海路を遙上洛其事を抄首風烈

して船中秘傳也と云ふ事ぬ老人來て擧ぐいと云ふて

事あり身はぬ又その後け老人不見不審也と云ふ事以

はつ後を春指みけるよ少人の御神託に宣出社

頭先府に合ありけふふ中のおろる松のい〜とて

傳〜昔のやくや位のはれ月〜よまき〜 録よ目知

是て今夜の取付は疑を馳しとやうも也此分合は
 卿西へ下向よりさだまけるやうに後成の判めては
 分勝るに述秘抄ふ等字の神のふ通以可也道にて
 為眼目々々然分を裁集は神祇社入題社頭目々々
 名公右左等々々

一宗徳三年十月廿四日常光院差條の天下をあらわす
 祝のりり流り侍しるるに五極中絶言詞ふたあふぬ
 と海成りし行けるを西行上人と云ふを夜連し
 侍しとくはた云代々勅撰の事新古今ハ撰者として
 條多あまは事しも難きふ裁ふのふのこは集りもは

撰者たふも宗嫡ふをぬさとして見そふは疑撰集の
 中名をいさうへしとく

一西行上人二年六月はつらつら伊勢西よりては法樂
 とて自分をも合さる也是と後成が定まらぬ判型
 ありたりふ宮川をハ定まら判拾まら侍従と
 くる時のふ也是を判メ定まら出らると西行と身そ
 或人の方へ判て西行の云侍従とてふ判判ふは是も
 ようんもさるまはとさうとくも行末をハこくは後成
 御宗よつとてそとされ後成の判ふとあて言り
 三々ふと此分合と判拾六百番千六百番の判人判れ

多ふふも重説いふことを終へ二年六月廿四日
ふ事おきて里とて不まを判し終へふりぬ
あつたはちの里る役おまゐりてなつた
是るを難由法系とてしり

一 京極董の朝に歌補法補基俊亡父の弟とて
集の姓やめをよりてとて作らむとて

一 くしたのさくふとて人あつたふりぬ
心けの又とてとて八年をよめる候ものやうな也

一 十月十八日常光院へ題してふをいふまゝなる
俊成の女とて中納言の姉と妹とを名付ぬは

中納言の為ふいふをいふ俊成のこめふは孫也ふは
用するふとて女と繋約有也後及のたんまんの外
なる人に只女鏡の人とて難

一 後撰集の奥之或かよの書板に集作者とては書
名朝臣字枇杷右大臣二首伊勢贈とて業平朝臣
名如け事後代の人或推而述之是非書写に誤り集
いふ説也不可更改

貞應元年七月十二日

為依後見とて説か凌光眼終書写し功

戸部尚書藤五判

同十の日以子息令讀合也付落字統

一常光院古今かまにせりし時よりハ忠之ふうと云文
字能今之能由なり也

一冬懐をも能歌ハ述懐懐旧をよきありり付る由法
書るるハ大形の思ふに後者也

一先年法よりなりハ日向草ハ松の名也と云く

一京極宮の懐哉自筆御所表補解して此度表を
るると安東遠州氏世々写也則ちゆて写留懐哉寸法
例式之

春日同詠庭梅久芳應

教和歌

侍従定家

とるれ日をひうのをふ

みろろちりてろと

かふろろや赤のむ

めかろ

和字漢字一字も不習文字は重根也

一正月十日拓月居る方始て此仕を握井及由定あり
若君此仰せふとて彼を料御うらたれ也
大和やそくの山は此れ山松もあつて世々此れ

けふを書してをて後愚かたをてを由作て則
詠をよみけり

末を能君うけあをいひて老の年と
氏世の由揚言ありて八苗府の時臣を
物館ありて干時拾月七年二早敷あり

- 一 心作してと云朝不奇詠の由多
一 二月廿日二首と詠事法部と為之二字二子三子又
一 二二日とも二首也大方八二首ありて同文字子孫を
又字此教をうへて宛時ハ中題をかゆる上中因又
字あて下をうめりてその孫を孫共也けりて事

上古の侍と詠者其業も若くは少くは多ありて

おとせありあはしる月清く風秋ふ吹あはしの言
法原の前けけおはははつ小集詠時入道及外條もそ
一 詠もくし討あけと云く也感ははるやと物語者

一 二月十六日氏世の由物語をるハ小集系のそよ和詞
意と云ふと拾月店

あふりて子孫の由もさそをのそあむおを
意為妨後世

秋みも三えんう入本のをはても君れはのそよ
一 祖父の西行と人のあを扶揚る由りてけ集をよける由也

此父も或人小可讀おのふと申すはあまのこをいふは
なをいへて花はさきの小成ふとのいふことふあるまゝ
只此類をいふうへて初言古事へて申すことや思ひま
深き事なり

一二月十八日より常光院山神社小系山社元胤同
道下て居て一冊をて歌十五首 朝梅 夕梅
夜梅 梅蕉枕 梅盛用 梅交松 山家梅
洞落梅 春待恋 春遊恋 春別恋 春羈旅
春神祇 け時元胤和歌の道下
事より由契の春羈旅と云類して法下

未だ越くまをくしり形に花はたちをも契まらぬ
一三月中旬は或人語傳一松月可契東 江上霞
ゆきくぬあらしの東の夕れや神めくさくことなる成心
まは浦の入にわをれ初屋お神とあるやとある心
一法下此云ふは事三句句終り文字と申田の句終り
字と同くれハ其類由なり
一室徳三年冬はけけ月の出類ふ初初恋と云は法下
事ハ古不見け類若自作はく古ハ新類をいふを
仁の由ハ雲のほおふもことなるを年け類多し終り
の好事も云く

一 雨とくさき建通再降脚也家をきくくたしと国事也
 一 ともやあまのあまをさし中朝國事之招月とくさきと
 云朝のまじりやとりやうた朝也

一 定家之誕生於年應保二年壬寅あひまの帝八代之時
 六条院高倉院西御代に於年あひまの二代集あつた
 年中也新勅撰集をくさしに於六十一郎の世二百番あ
 合にあつた建久元百番あつたあひま廿六歳あつて
 子教集を入るに集くくさしに於集あつた二年二月作
 小して文治二年九月に奏覽也とる百廿月也

一 俊成之誕生永久二年甲午とある帝九代也甲午九歳あつて
 宣宗誕生基徳とる古今あつたあつたあつたあつたあつた
 歳あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 判八年八歳あつて子あつたあつたあつたあつたあつた
 を始と九年二歳あつて二歳と

一 宣宗の父源朝平は氣をくさしに於あつたあつたあつたあつた
 ころ抄奥書あつた見合とる源平定頼可多徳徳四年
 五月廿一日雨中也
 一 六月一日法平とあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 皇右官太史のころ名長秘也御間俊成の家集を長秋
 秘事とる

定家之集を拾遺 愚年より初学百首の時依
為侍従如侍侍従のうら名拾遺といふ也

戸部尚書民部卿のうら名民部少輔を戸部少卿といふ

人丸新ハ兼房兼見をて別畫三を百之如兼見
白河院に彼影を進上り顯季に新を戸部少卿に新
を行く也新供の時於一序ノ顯一首水風来喚と
各録と為備供ハ後頼朝を呼り彼新長も
上二所もより不後新を呼りハ能と進道新
供永久年中始行を讚波出里海ノ水を為新供
領下新季の年於新供彼家中終する事也

正應年中其懐の隆博の信顯季其孫也則隆博が序
少て新橋改行日好資宣を法と初秋風と顯季少て資宣
里村あまの煙をのむとあか秋は例せ
二安懐の事を録せり顯季新供始行日好教光下
人丸讚を書き資宣ハ其孫也

三又記事非定家作物の中略其末と二帖去旨
一帖ウコシ一帖ニ記一帖以上五帖之類は傳多彼々の詞
多くは内見をて用は抄之内ハ七葉は時
父のくすけは建中殿系内ノ時初テ分仕ル今殿の
秋と云ふ侍を不斜殿感より多と云一被宗作

那の澄掃之其ありを討て帝の奉院をて由る被令
七女の時帝の氣にやうまるとされ御意ありて由
知死條をる事細程口傳り

蟬丸之事延喜の御子と明と古今討ては名好して
仙人一人あり人思けりて卒後蟬丸と名をけり
可秘之玉後撰名

祇園寺持事ありておあつらひにけ物とのあ
おのせあり一具利の心也又古より可見可秘

延喜御門延喜五年八月十八日ましましるふより
入御製之也制り玉書番

一 六月二日醍醐天皇の御事妻考御を法皇如指系
と御不則又被考を私御亦相付し由被りて御不
面ふし由る光孝を皇の御事仁和元年己酉月
十八日酉誕生御昂信寛平九年丁酉七月十二日
十三日之延長八年庚申六月廿七日

一 宮中と人世皆以考延喜御子全此之延喜三年癸亥
誕生天福三年壬申七月廿七日入藏仁和の御子常康
親と宮也如付也可秘

一 寧^{ナス}轉^タ讀^クやうれふたふあふ字を傳ゆと

一 六月二日御法皇の御子ありては八景門の心

平この乃翁とノ類はたつと返事ニ皇門おやことし
 少も道おつつけいハ聊々お習しやむこれのこま
 を中におさしと僧馬車もつていひたるも鳥居也
 一兼好うはまといまゝ今集を糸つゝものめりふ
 と貫之う清らうと今集の中はくさうやと傳傳今
 世のふいふいふといふとハ不身とさく

一えあふぬハ朝も長程く清く何事をもたぬ也

一たはつむいぢやう後撰作者

一命婦とハ五傳うぢやうの女を云也更衣ハ門の内はたぬ
女房也

一續後撰廿卷ニ亭子院信むしくう時いまゝ西子也

正月初子日むしの朝うぢやうと名まじ也方むしもさむせもた
書月を延むしる十一二のはたけすは中位むし率むし御制むし

二葉ふたを招ハむしもく一記むしをくむしもこよ

以之思むし門むしおむしとありまむしと今むし御むし前むし小むし介むし
 説むし不むし謂むし侍むしれむしと法むし名むしハむしとハ此集のむしはむし傳むし也むし
 一或抄むし小むし基むし泉むし法むしと云人のむしなり

本むしるむしふむしのむしハむしのむし愛むしやむしらむしのむし海むし斗むし海むし入むし初むしも
 此むしのむし玉むし葉むし集むし基むし泉むし法むし師むしとむしのむしはむし法むし撰むし法むしとむし同むし人むし
 みてむしのむしあむしやむしとむしるむしとむしハむし左むし格むしおむし死むし不むし是むしハむし申むし夜むし中むし也むし

一六月廿日物川右京守不令有額者拓月辰歌九条
前内大臣家百首也付夏の初最初林早夏と付林
首夏と付これ付早夏と付額を今亦六稀付るに
ころを如た書りてころの付遺恨之或人會を其ん
付る由物語りて書付付るなり

一室徳元年七月廿二日お常光院承奉り

君父とハ君やしたつめらんこ

孫ぬなとぬふと同事也他とも事也公方也ふ冷
泉持為あやれ孫と上向小讀て下向小讀ぬふと讀
ころ如たころをふふふふふふふふふふ

作者ノ讀やうの口傳

俊生

山上億良

額田王

お常君とやりの布子れまのを何のおかこころ也

置始東人

名のりハ
口傳

懐け字ハ名のりハヤと
と讀むとある

まことをの衣あつさ存也

拾遺事書、兩冊の日こあし付るまこと付るといふ人さ遺
短冊のふはらと書付事名あれた、ゆこのの終はるり
そとふ付るて拓月の説也懐か同

一享徳元年六月六日於常光院初お條々

拾遺事書、おけこ、おをここと今、操をころあしと
付のころい名のやうに孫らやと、りゆ也

叙位と申八人ふ位を下さるを初る事也

詠天一向空の事を可詠也詠菓草木を可詠也

朝光 朝忠 國章 りりけ字名のみよつて 平祐舉 平公誠 トシ

輔昭 平忠依 源寛信 スレ 高向年春 タカシコトシハル

三統元夏 源致方 慶滋保胤 統理 春議 ハルトシ 上

扶朝朝臣 字子内親王 輔臣 治部卿 仲統 ハ子

北邊大信 惟宗成長 コレハ子ナリナカ

水樹多佳趣け歌池のあつた本を祝させしん

つるるもんと讀之

一 享徳元年後八月九日

君が為春の好ふ如くもつひけおをるん膝の

より 祓節 侍

一 揚名外とハ諸由之源、人たる之が秘の侍、常陸

必上野國上総必之守大守の親王御不臣、然る以之

國女為揚名外

一 自讚の事西上人け人教之、是を不審そ有ハけと

人達久元行生あり、至極中納言の予ハ建久元年の百番

祓或ハ文建仁二之三辨を被書入皆以人滅後之

いそぐ自讚を此可の人教哉、由尋之宗、そり上人於

け道者平懐之去回毎夜自讚其あり是を被受を
て今中人教ある者皆少墨を不侍まとも分りあつて
被り早招月窟の中なるまも大畧又一回之西之令
製撰分りたるけ作者之讀やう近世の讀うたるひそ
そは法一向たり可秘とる

一十月十九日召侍りて

まはかりて三ヶ由とる

ゆりて萩原大和とる

屋敷よきなまの近江のま

たすけよきたる此けはま有けま末名ふよとけと

くもけ西を末出家嫡云く

俊成の女新勅撰よ入る人ハ彼々の孫之け道急用
多ふ依てまのり俊成の女之俊成ハ俊成の

一 佐吉の社事一社ハ伊勢太神宮二社ハ諏訪二社ハ
佐吉の社ハ玉は鶴

一 玉津嶋ハ社下あり高居なり一 只漫々海城
ふ古松一本松ふ是を玉は鶴垂跡の志る一とる
猶も續括遺時為成々洛中より社を作せて玉は
鳴社檀ラ立へこ由被あて集積を則彼西の社檀を
建ふる其意あるは風立て一社の中ハの中壇あり

と云くを述ぶる後ハ本の如くして古松斗也

一 林項^{テイ}彈^イ如題世皆以頂^{テイ}と讀^イ語^イト云く

一 羽をかり^イ枝をさく^イんとの之^イ繁^イ一人^イある^イて^イゆ^イふ
ま^イこ^イの^イ月^イ日^イく^イぬ^イの^イ侍^イお^イく^イふ

あ^イさ^イし^イる^イも^イ洞^イあ^イら^イれて^イ塵^イの^イは^イら^イる^イ床^イは^イと^イう^イか
筆^イの^イ次^イ侍^イし^イ書^イ付^イ侍^イ之^イ根^イ藉^イの^イ至^イ也

一 詞^イ苑^イ集^イ之^イ題^イ廣^イと^イある^イハ^イ後^イ成^イは^イゆ^イ之^イを^イ載^イぶ^イの^イ後^イ後^イ成^イ
と^イ改^イふ^イ也

一 竹^イま^イる^イ忍^イを^イつ^イの^イを^イ 為^イ尹^イ淵^イ

この^イの^イ書^イ付^イ侍^イし^イ書^イ付^イ侍^イ之^イ根^イ藉^イの^イ至^イ也

系極中納言

- 一 秋^イお^イお^イの^イい^イら^イふ^イ都^イ名^イを^イら^イか^イけ^イと^イよ^イ出^イの^イ記^イの^イあ^イい^イに^イ
然^イ録^イの^イよ^イ好^イ事^イ之^イ為^イ尹^イの^イ前^イハ^イ歌^イの^イな^イを^イ遠^イく^イ思^イふ^イ人^イ
は^イあ^イを^イす^イて^イし^イと^イ人^イの^イい^イと^イん^イは^イ後^イ中^イ納^イを^イけ^イら^イし^イ侍^イの^イ
一 遊^イ士^イ越^イ園^イ古^イ人^イお^イり^イハ^イ旅^イを^イよ^イむ^イ松^イ後^イの^イ人^イの^イよ^イう^イた^イた^イく^イ
一 武^イ明^イ一^イ合^イ上^イ又^イよ^イと^イや^イう^イあ^イら^イ可^イ為^イ
一 百^イ首^イと^イハ^イ堀^イ川^イ院^イ始^イの^イ回^イ唐^イの^イ分^イ系^イ雜^イを^イち^イら^イす^イの^イ大^イ
畧^イ是^イ始^イと^イす^イ

- 一 新^イ古^イ今^イ入^イ道^イ方^イ大^イ信^イと^イる^イハ^イ三^イ條^イの^イ実^イ居^イ上^イの^イ佛^イ事^イ之^イ
一 頼^イと^イ三^イ月^イ十^イ五^イの^イ八^イ十^イ日^イと^イて^イ遠^イ行^イ之^イ彼^イ末^イ朝^イと^イ云^イふ^イ所^イ也

一橋を渡るやうとよむと斗そ彼そ一拾也か合言之
可作可信彼可ふ

名よりぬ流山の多其ありて逸人も好美本の下を
日くねむハ遊人もあまはるるは流の音イありしして
けりにお似れ殊勝こく

友も好と流山は居ふ志を建て世ハ知る知れぬのありあ
けあり愚問賢答まわし時覇中風光山林と水
を讀と事ハ可也

一貫之女説基俊 顯李家 六条 弘補九条 可及之流大黒持之
一經文時の端作のやう

季日聴講法華後同詠

又輕品和可

名ニ案ある一

一佛子たの家よりハ為定為遠為衡也彼感をハ藤條信也
定家五種が為家と中院が為氏と冷泉が為世と一
一をくは家大和必ありをくハ山崎職小ありと
一花流山氣色と云題 東極黃門

五すくしおのこもたをやめは流る衣ふおるま風
山と云題ノ詩小

執扇抛来青黛露 羅帷卷却翠屏明

此詩みてけりて人大概知之と師説あり

一 為家ハハ少年時ハ慈法ノ師坊ニ何作有若年の時ハ
 歎為吾意用の田沙法有て父弼折言ハ諫すまゝ
 禮ふ日吾社ニ参就有て一七日間ハ子首を讀まゝ
 けり能出末をてハ父弼も慈法も内収をけり子首ハ
 月立春ノ分斗をてて先俊見せて父弼ハ收まゝ
 七日の間ハいほくもななく念珠ある衣の袖ハ
 と云文字一寸口より斗ノ紙ハ出でて場りまゝ
 是を誦多むく思て下向ありけり其年也貞應
 の中れあふけり云文字といをてまゝの法も物法

有享徳三年九月の法あり

一 以キ如法信名ふよむを案

一 ようさうハ散をハミハ山極むはまのぞ侍りて
 然るれ本ハ百葉集

みらけくのまはるる遠かれ侍りけりまゝ
 大宮ハ梅のおちひよとほし曇りまゝとてあまの月
 然分れ作者の心をあまふま明及暗の朧月よ白て
 感情せ極むあやる月あまを物おとてまゝ
 ささくし梅のおちひよとほし曇りまゝとてあまの月
 侍り享徳三十二朔日ハ物語也高倉の亭子也

一 在任おまると云ふに方通お監みして有あつて後五位下
叙するをたまふと申す之著しく人好しく侍らぬるを
親く子細を人より教へ

一 宗瑞親友お知し後五位下侍らばたまふと云ふ
方通とつらるるを御事と云ふ此計ハ後五位下
をたまふと云ふ之御事方通おまると申す之御事
一 室お院殿の御事之御事

今何れ君おあふ守ハを御事之御事
室所殿始て此御事之御事首おらして享徳二十四二年に
お申會有

一 懐中事等筆の合ふ所をハ季日なるをたまふ御事
端作ハ之御事之御事各ハ友達と名を御事之御事
歌の時ハ季日姓お友達をて書

一 享徳四二年を升後して之御事
谷原ミ生と云ふ御事之御事之御事之御事

一 同年三月廿六日鳥山方通御事之御事

一 実名ミの成ナリ就ナリ

一 永享年中八月十五夜 嘉明

時ハあはれ秋の御事之御事之御事之御事

月一付

氏數 枝イ

月三人も程をみぬ人の秋をいふある事ありし
 一 康正二年 隆謙倉拾遺 凡 柿集といふ ちていし
 の撰を不知 其中に 嘉蓮のころ ありあるは

寄島表

二の初めをいふ ちていし ありあるは

題不知

一 ちていし ありあるは ちていし ありあるは
 一 隆謙倉 或人のちていし ありあるは
 一 或人 ちていし ありあるは ちていし ありあるは

ちていし ありあるは ちていし ありあるは
 一 當所制家

ちていし ありあるは ちていし ありあるは
 一 元雅 ちていし ありあるは ちていし ありあるは
 一 吹か ちていし ありあるは ちていし ありあるは
 一 ちていし ありあるは

一 康正元年 十月 十日 馬か ちていし ありあるは

を以てするにふりて得勝利又同二年二月十九日敵に
を以てして勝つるに成敗軍如何若くは定ぬるに原誠後
討つに時を事立て難き和歌類為子孫加ふ者也

右東野別抄を以て勢別林倚文庫之本換焉

群書類従巻第二百九十八

